特別寄稿　特集「糖尿病」

糖尿病性網膜症について

松岡　貴大

静岡赤十字病院　眼科

Ⅰ．糖尿病が目に起こす恐怖（図1）

網膜症は，発症してもある程度進行しなければ，自覚症状がありません．そのため，症状が出ている場合はある程度進行してしまっている状態だといえます．症状としては，本来ないはずの小さな虫のようなものや，黒いカーテンが全体的にかかっているような症状が出現します．症状がさらに進行すると，視力低下や視野が狭くなり，最終的には失明の危険もあります．

Ⅱ．糖尿病性網膜症の原因

糖尿病性網膜症の原因は，「糖尿病によって高い血糖値が持続すること」です．糖尿病によって通常よりも高い血糖値で経過すると，余分な糖分は徐々に全身の血管を痛めつけ，ボロボロにしてしまいます．その結果，眼の中にある細かい血管が破けたり，詰まってしまうことで起こります．

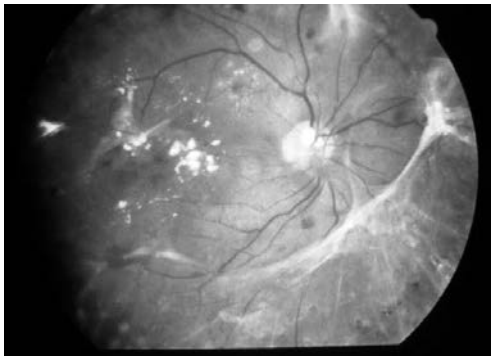
眼の血管は血液の流れを確保しようと新しい血管を作ろうとするのですが，新しいが故にとても脆いため，簡単に破けてまた作って，を繰り返してしまいます．この働きにより，本来はクリアでいなくてはいけない硝子体に新たに一枚膜ができ，この膜が網膜をはがしてしまうことで，視力が低下したり，最悪失明する恐れがあります．

Ⅲ．糖尿病性網膜症の治療

糖尿病性網膜症の初期段階である網膜のむくみや出血が見られた場合は，「単純網膜症」と診断されますが，この段階では血糖コントロールに重点を置き，これ以上進行しないようにする治療が行われます．1年に1回でよかった眼科での定期健診は3～6か月ごとになり，より慎重に進行が見られていないか確認していきます．

症状が進行し，網膜内の血流低下が認められた場合は，「増殖前網膜症」と診断され，光凝固療法を行い，これ以上の出血や新たに出血するのを防ぐ治療が行われます．さらに症状が進行し，血流を補うために新たに細い血管ができては出血を繰り返す状態となる「増殖網膜症」と診断された場合には，硝子体手術を行いますが，一度低下した視力を元に戻すことはできず，あくまで失明を防ぐための治療となります．

A：正常眼底



B：糖尿病性網膜症

図1

Ⅳ．糖尿病性網膜症は予防が大事

糖尿病性網膜症は，「初期段階では自覚症状がない」という部分がポイントとなり，特に長期間にわたって糖尿病を放置している患者さんにみられる症状です．自覚症状がない分，患者さん本人にも深刻さが伝わりにくいのですが，糖尿病にかかっている方のうち約40％は網膜症を発症しているとされ，毎年3,000人以上が糖尿病性網膜症によって失明しているとされています．

糖尿病を未治療で放置した場合，7から10年で約50％，15から20年で約90％が網膜症を発症するとされているため，糖尿病と診断された時点で「最悪失明するリスクがある」こと，そして「定期受診の必要性」を指導する必要があります．

連絡先：松岡貴大；静岡赤十字病院　眼科
〒420-0853　静岡市葵区追手町8-2　TEL(054)254-4311